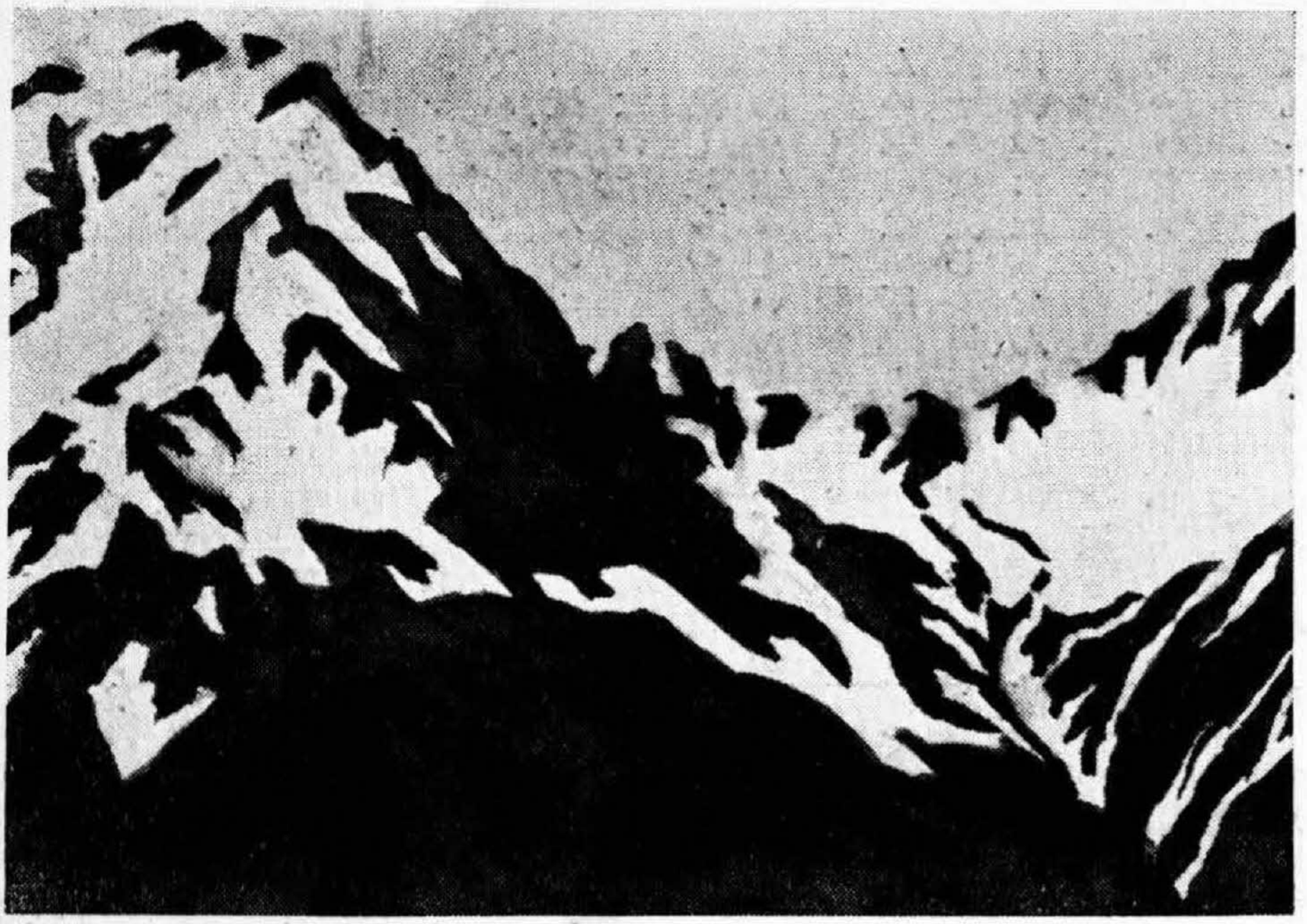

針葉樹會報
通卷第七十一號

近ちやんを送る言葉

P E N

近ちやんが遠い所に行く。昔ならば太宰府の向ふと云ふ所だ。關君のロンドンや河相君のメルボルンに次いで遠い所だ。

落ち行く先きは九州三池と云へば心細いが、是は近ちやんにとつては目出度い榮轉なのである。近ちやんは今重役街道に一足踏みこんだ所だ。唯直すぐにその道を進めば行途に輝く榮光がある。だから僕達には淋しいが近ちやんの爲を思へば嬉しい。

嬉しいには嬉しいが僕にとつては都合の悪いことが色々ある。

夜遲く歸つた時は近ちやんと一しよでれと云ふ。その代り恩は忘れないで、スツカリ近藤に御馳走になつたよと云ふ。これからはその手が使へなくなつた。

山へ行く夜汽車で近ちやんと並んで腰をかける。窮屈の樣だがそうでもない。近ちやんが例の優秀な空氣枕をとり出して窓際によりかかつて無邪氣にスヤ〳〵とねると僕が近ちやんによりかゝる。洵にフツクラとした好きクツションを提供してくれる。然したま〳〵逆作用で近ちやんが僕によりかゝると蟬に大木がさまつた樣でいとも悲慘な結果となる。これから夜汽車でも好いクツションがなくなつた。

近ちやんとエノケンや五九郎をよく見に行つた。近ちやんがエノケンの舞台を見つめてゐる樣子は非常に面白い。面白がつてる近ちやんを横で見てると何だかこちらもつり込まれて可笑しくなる。これからは舞台と近ちやんの面白味の二重奏もなくなるわけだ。

近ちやんの會の爲を思ひ、部の人を思ふ至情は言はずもがな。みんなみんなシミ〴〵と胸の底まで感じてゐるだらうし、骨髓まで徹してゐるだらう。

手相論に至つては堂に入つたものである。當るか當らぬかは紙一重であつて、

氣の迷ひを以て聞けば一から十まで當つた樣だし、それに近ちやんは一から十五までも當つた樣に云ふものだから聞いてる半信半疑の當人もスツカリ安心立命する。かくも人をたぶらかすの術は全く玄人はだしで恐ろしいものがある。

近ちやんの色んな時、色んな處で起す錯覺や、豪勇や頓智はそれこそ數へ切れない。昨年の暮の省線電車の閉りかゝつたドアエンヂンを押し開いて入つて來た武勇傳なども輝かしい記錄の一つである。

近ちやんの云ふ事は嘘ばかりである。とは誰も夢にも思つてはゐない。

然し近ちやんは決して嘘は云はない。と云ふのも知つてる間では餘り空々しいお世辭となる。だか近ちやんの云ふ事は嘘でも本當でも決して罪が無い。と云へば誰も肯くだらう。これは近ちやんの德の至す所、人格の然らしむる所である。私が本誌に「本体論」を發表して以來幾星霜、遂に我れ、人共にその人格を認むるに至つた近ちやんの努力精進たるや涙ぐましいものである。

會ふは別れの初めとか。近ちやんと會つたのは何時の時か。ハツキリ覺えてないが、次から次への山旅の數々。そして最後の山旅が昨年の暮の黑菱行だつたらうか。いや。お正月一日の夜たつても一度黑菱へ行こうと約束した。そして元日の夜六時半頃リュツクサツクに荷を詰めてる時電話がかかつて來た。奥さんからで今日はスツカリ酩酊して唯今前後不覺ですと云ふ。二日の晩たつて來ると思つて僕一人混んだ新宿の驛からたつた。對山館によつてこの間來た太つた人が明日來るかも知れませんと云つといた。

二日午後黑菱着。

三日今日は來るから知れぬと思つて新雪を蹴つて（と云ふこうまい樣だが例の金釘流のシュプールを描いて）細野スキー小舍まで下りた。待つ程に來ると思つたが來なかつた。さては二日酔で立てなかつたのかしら。

四日午前八方尾根に行つたが吹雪で歸つて來てまだ早い。事によると來るかも知れぬと細野小舍まで下りた。矢張り來ない。これぢや奴さん三日酔かも知れないぞ。元日の前後不覺の近ちやんの姿を思ひ浮べて可笑しくて仕樣がなかつた。

近ちやんは今度は一しよに行けなかつたと云つて恐縮してるが數ある山旅の中でも斯くも愉快な感銘を殘したと思ふと僕は一しよに行つたと同じ嬉しさがある。度々の山行の最後をこんな痛快な奇拔な思出でピリオドを打つてくれたのを僕は喜んでゐる。

色々數へ切れない話の種を殘して近ちやんが九州へ行く。その東京に於ける存在を失ふと何だか大きな穴が開いた樣で埋めきれない淋しさがある。

近ちやんは十年位は歸つて來ないそうだ。今度お江戸日本橋に歸つて來る時は近ちやんの人生の道中双六も「上り」に近づいた時であらう。例の競馬の大穴よりも、もつともつと私はそれを待ち望んでゐる。

「近ちやんを送る言葉」をクド〳〵と書き綴つた非禮を許して貰つて、別れに臨んで「近ちやんに送る言葉」を十誡として餞としよう。

一、汝針葉樹會費を忘るること勿れ。子曰く「自ら出でたるも

のは自らに還る」と。

二、汝出發の日は大酒してれるべからず。狸寢入ならばよし。前後不覺とならば見送りの人の迷惑思ふべきなり。

三、汝東京にてなしたる惡因に心せよ。惡果を未然に防ぐべきなり。江戸の敵を長崎でと云ふことあり。

四、汝カクランに心せよ。カクランは人にも鬼にも起るものなり。

五、汝バカ貝を恐れよ。共食ひは怖るべきなり。汝バカ鍋を食ひてより胃散過多症になりたるを忘るること勿れ。

六、汝貨物車に乘ること勿れ。汝にも人格なるものある筈なり。

七、汝切符を落す勿れ。汝元來物を拾ふに巧みなり。古語に曰く、よく泳ぐものよく溺るゝ。心せよ。

八、人を見たら泥棒と思へ。然して汝も人なり。故に自分を見たら泥棒と思へ。

九、汝身体丈は大事にすべし。頭の方は今更何としても致し方なければなり。

十、汝人間たることを夢寐の間も忘るる勿れ。忘るれば忽ち術の破るる惧れあればなり。

父なる神の榮光永へに近ちやんの上にあれ！

針葉樹會十年史稿（二）

増山清太郎

（四）

昭和四年の春になつて、先輩群は浦松佐美太郎氏の歸朝と、曾田莊太郎●近藤恒雄●高木英二●冠木啓藏●赤城鈴太郎●森竹五郎諸氏の卒業を迎へ、やがて吉澤氏も歸京して、再び活氣を呈して來た。他方山岳部に在つても、豫科三年の一橋に於ける授業が廢止された結果、部員相互間を結ぶ特種の催物の必要を認めるやうになつて、頓に針葉樹會復活の氣運は萠して來た。が、それにも增して大きな刺激となつたのは、早稻田大學山岳部に依つて提唱された關東學生登山聯盟の問題である。同聯盟は成立後三歲に滿たぬ中に、加盟團體間に意見の齟齬を來し、運行の困難を伴ひ遂に所期の目的を達せぬ中に解散の運命を辿つたが、その趣旨は誠に結構な事であり、この短い間にも或る程度の功績を認める事が出來る。詳細は本項と關係はないが、兎に角この種の試の常として、始めは部員と共に一部の先輩が動く。さうすれば先輩と部員との交渉が頻繁になる。策動した模樣は、關係者に報告して承認を求めねばならぬ。それには例會の復活といふ手段を採るのは極めて自然な方法であつた。實際例會の復活第一回を昭和四年六月二十一日、如水會館で行つた主たる目的は、一部の先輩、部員から、前日の聯盟創立準備會の次第を報告し、併せて今後聯盟成立を目標として活動を續けるに就て、全員の諒解を得るに在つたやうである。

この日、小集會室の前には「針葉樹會」といふ札が立つてゐる。話も大體濟んだ後で、吉澤氏が、「假にこの會に針葉樹會といふ名前を附けて置いたが、どんなものだらう？」と言ふ。「至極よからう」つて譯で、茲に簡單に會の名前が極つてしまつた。名前の由來は、恐らく三田の登行會、法政の山想會あたりの眞似であらう。

前述の通り「一橋山岳部之會」は、內容を正確に示してゐないし當時如水會の頑老連の間にあつて、學生があまりに會館を利用し過ぎるとの苦情があつたので、それに對しても名前を變へた方が好都合なのであつた。

針葉樹會は復活した。第三金曜に集ることも、幹事を置かぬことも、先輩が五十錢出すことも、總て前の通り。併し今度は日を忘れて缺席する人はなくなつた。豫科の部室には一週間位前から「何月何日針葉樹會、部員は擧つて出席すべし」つてな意味が、名庶務係と唱はれた太田ドンチャンによつて掲示された。本科の方も略同樣だつたらうが、先輩の方は一體どうしたのだらう。誰か氣を利かせて通知したのだらうか、それともほんたうに忘れないで出て來たのだらうか？

會合の模樣は、新入部員を紹介したり、部の近情や山行の模樣を報告したり、次に雜談に入る。幻燈や十六ミリも出て來る。詰り現在のそれと同じやうなものであつたが、當時豫科には部員が少くて、且つ吾々三年生を除いては、頗る溫和しい人達ばかり。山にはよく出掛けるのだが、この種の會合に顏を出したり、部室でナンセンシャルな駄辯を弄したりする事を好まない人が大部分であつた。それを私達頭株の怠慢の致す所として、この會で度々叱られるのには閉口した。なかには「部室に碁、將棋の類を置て人心を收攬し、針葉樹會には强制的に出席せしむべし」つてな珍案——こんな言葉を使ふと、また叱られるかも知れない——を示してキメつけられた事もある。或る時には「山岳部もあまりお高く構えてゐて、後繼者がなくなつては困るから、もつと卑俗なものに改めては如何」などゝ提議する先輩もあつた。そのたびに私達は「精神の籠らない山岳部の表面の繁榮を圖るよりは、寧ろ潰した方がよい。現在豫科山岳部の振はないのは、社會狀勢が惡いからだ。しかも私達はごく少數乍ら熱心な部員を擁してゐる以上斷じて山岳部の格下げなどには應じられぬ」と頑張つたものである。

實際あの頃は、社會經濟狀態が一として山岳部に味方して呉れなかつた。だから、立敎が僅かに光るだけで、他の學校山岳部はいづれも沈滯してゐたのである。先輩の目から見れば、自分達が作りあげ、自分達が發展させた山岳部が末細りに弱つて行く。それをヂッと見てゐるのは辛かつたであらう。然し話合つてみれば能く了解して私達の爲すに委せて呉れた寬容な態度は、私の深く感謝する處である。こんな所にも、先輩と學生と膝を交へて語り合ふ必要を、痛切に感じるのであつた。

また或る時は、山に登る氣持に就て、また黑部川發電工事の可否等に就いて、討論めいた事を行つたり、新刊書、稀觀書の紹介だの、會外の名士を招いて話を聞いた事などもある。要するに全體として頗る和やかな、氣の置けない集ひの中に、かうしたオッカナイ場面も、理屈を言ひ合つた事も、また改まつた氣持のあつた事も、現在と變らない。中川氏の長廣舌も次第に名物化して行つた。

十五首

K

春淺き眞晝をぬくみ池の面の薄き氷にたづ立ちねむる

4

ひたむきに母の與へし乳を呑む子よ五十年の生を樂しめ
うつしよに生きて果つべき五十年人事ならず迫り來るも
つれ〴〵にめくりしスキーの宿帳にうへ越す年齢(よはひ)のなきがさびしさ
雪鎧ふ利根水上(みなかみ)の山にしてわれにしたしき幾山のあり
全身をこのシュヴングに打込みて下る心に愛憎もなし
幾めぐり利根の川瀬は見えねども心にひびく深き渓音
なだらかなる枯裾原のひろごりの大空こめて冬の氣かたし
西の國にしばしを別るる友の子のまろき頭(こうべ)にわが手を置きぬ
友一人西に送りて仰ぎたる東京の空はうつろなるかな
何がなし寂しさありて眼をさぢぬつどひに逆くわれならなくに
ましぐらにいづくを指して流るゝかあらしの後の黒き雲あし
便りなき日々をさびしみしみ〴〵と自嘲に過去を掩はんとする
温き言葉に感ぜし涙なり命死すべく誓はざらめや
柊の散りの幽けき夕まぐれ人佇みて何をかも思ふ

三角

牧野スキー行

平々凡々の生活で別に報告する樣の出來ごともなく御無沙汰してゐました。今度關西へ來て初めてのスキーに出かけましたので近況報告に代へスキー行を報告します。

一月十五日夜銀行の連中と一緒に近江の牧野へ出かけました。丁度大阪府スキー聯盟主催の耐寒スキー行軍の日なので大津から船に乘つたのは千六百名ださうで船は滿員の盛況なり、僕等が船に入つた時は最早先に來た奴等が良い處に陣取つて入る處もない。づう〳〵しく少し餘裕のあると思ふところへ割り込んだがとても寢れるどころではない。船長室から牧野は小雪との報にさぞよい雪だらうと思つてゐたのに朝着いて見るとどしや降りの雨なんだ、くさつて船の中で一寢り、さて五時頃になると小降りになつたので自動車の乘場に行つて見て驚いた。野球の切符でも買ふ時の樣に列を作つて押し合つてゐる。何しろ十一台の自動車で千六百人を運ぶのだしその上雪道を走るのだから故障が起る、そんなことで乘る迄何と一時間半もかゝた。

スキー場に來て見ると雨は小雪に變つて居る。見渡せばなかなか廣いゲレンデだ。一寸赤倉の感じがする。緩やかなスロープだ。高いところで千六百人の滑つてゐるのを見てゐるとまるで芋洗ひの樣だ。その服裝、道具、技術、乘り方實に千差万別だ。概して關東より下手なことは確だ。丸二年振に乘るのだから雪の上に出たらヂツトして居られず矢庭に滑つて見た。雪はザラメだが良く滑る。午前中はこのゲレンデで充分滑つて早書飯を濟ませて奥牧野へ出かけた。左の方に斜に上り尾根に出ると一こぶ越える毎に良い雪です、風は北から眞正面に當つてくるので吹き飛ばされさうだが上越では一寸見られぬ雪になる。關西のスキー場だと馬鹿にして來て見たら毛無よりも遙によい雪質だ。シールを取りはづ

す時には手袋なしでは困る位だつた。久振りのスキーにこのよい雪に乘れるとは全く幸福だつた。

すつかり關西の山が氣に入つちやつて日曜日は隔週にスキーに行くことに定め、スキー場を順次巡つて見ることにした。(順次報告します)

歸りは來る時と同じ樣に乘合に待たされ、混雜の船に苦しめられた、これだけは何とかならぬものかと思ふ。船は混雜しても足を延してゐられるので汽車より樂だ。—一三、一、二三—

田部さんの話

以下は本年二月十七日夜針葉樹會席上にて田部さんが語られたことを纏めたものです。(柿原)

私の山登りは古くなつてしまつて、今日若い方々が行はれてゐる樣なものではないのです。然し私は登山に關する限り、日本的な登山と西洋的な登山とを判然と區別し度いと思ふのです。

私は數年前吉野山を訪れた事があつた。講演に行つた時不圖訪れたのですが、その時閻の行者の刻つたと云ふ不動像を見た。私がその像を見て驚いたことは、何と云ひますか物凄い程にその姿は苦難の相を現し、戰を挑んでゐる。閻の行者は日本登山界で省みられるべき人ですが、その人にして此の樣な强い苦難の相を刻むのです。然し行者は晩年又若い時のまゝの和やかな像を刻む樣になつてしまつてゐる。

省みて西洋の登山家を老えてみますと、ウインパーでもそうですが、浦松さんの譯を朝日新聞に紹介する時二册讀みまして、更に處々原文に當つてみましたが、ウイムパーは決して山に登ると云つてゐない。必ず attack と言ふ言葉を使ふのですね。是は何も高い山のみには限らないので、西洋人は低い山に登る時でもこんな氣持でゐる。山を attack すると言ふ氣持です。山の頂上に二三分間程も居たゞけで大自然を征服したと考える。どうも西洋人には自然に同化すると云ふ氣持がない。

皆さん西洋文學を相當御讀みと存じますが、佛蘭西人など全く自然を歌はない。歌つたとしても、春になつた、蝶々が互に睦じく戯れてゐる、だから人間もあの樣に戀をしろ、と言ふ譬諭に使ふ位のものです。自然を歌ふこと多しと云はれる英文學の中でも僅にワーズワースとバーンズだけが自然を歌ふに過ぎぬ。

こうした氣持が何處から來てゐるのか判りませんが、ギリシヤは女を輕視して亡びたと言はれる。女房は子を產ませる道具で、あとは夫は妻を極單に憎む。そこには戰だけです。從つて愛の女神を持ちながらギリシヤには本當の戀愛が無かつたとすら言はれる。プラトンとソクラテスが僅に女性の人格を認めたにすぎない。

翻つて日本を見ますと、万葉、古今悉く自然を歌ひ、芭蕉の句中自然を歌はないのが僅に二つだと言ふ。戀愛にしても日本の男女は天眞に戀をした。日本人はどうしても自然の裡に深く同化して行く傾きを持つてゐる。これは和辻君の言ふ風土の影響かも知れぬ。ウイムパーなどあれ程山に登つたのですから、もつと深いものがあつて良いと思ふんですがありません。で私は登山に關する限り、日本的な登山と西洋的な登山とを判然區別する。自分の持論を述べさせて頂いた次第です。

山岳部報告

（十二月、十三年一月・二月）

日誌

○定期部員集會　於本科部室　出席者（本科六名、豫科六名）

十二月三日（金）望月より武能岳、笠ヶ岳行の報告あり、且つ三月の方針につき内定を見た。

十二月十日（金）於豫科部室　出席者（本科六名、豫科六名）

今冬の合宿につき個人用品の細目を説明した。

○準備會　十二月十八日（土）後發隊の荷物の分擔、器具の點檢等を行ふ。

○定期部員集會兼報告會　一月十四日（金）於部室

出席者（本科七名、豫科六名）

冬山の各般の報告を行つた。天候の悪いため今回は頂上らしい頂上は踏まず、何となく物足りない氣持だ。

○送別會　一月廿二日（土）於「ぽたん」

出席者（小谷部、望月、小林、森脇、和田、以上卒業生、森川佐々木、榎本、鷲崎、原、船本、岩崎、大塚、里見、木島、高橋、宮城、山田、小泉、久保）

送別される者も送別する者も、親しいグルッペの一部が分れることになるのが何より辛い。しかしこれからも山岳部は益々發展して行くであらう。

○定期部員集會　於部室　出席者（本科六名）

三月の大體のプランを作つた。奥又白と、鳥海山と、豫科の赤岳鑛泉合宿が主な計畫である。

記錄

(1)八方尾根（一二、三―一二、八）原、岩崎

記錄的な大雪で黒菱の登りには汽車のラッセル車の悲鳴を聞きつゝ苦闘した。しかし七日には快適に晴れて、グルリと尾根を取り卷く豪壯な景觀は素晴しかつた。

(2)富士山（一二、四―一二、六）

相當な強風のため八合目で止むなく引返した。

(3)德澤小舍合宿（一二、一七―二七）

先發遂森川眞三郎、榎本直司、船本文治、大塚武、日江井正己は十七日夜出發、十八日中の湯、十九日德澤小舍、二〇日奥又池に向ひしもルンゼにて日江井負傷のため小舍に引返す。二一日中の湯迄（榎本は小舍に滯在）行き、日江井は後發隊の小谷部と共に松本へ下山。以後の行動は後發隊に同じ。

後發隊（小谷部全助、佐々木誠、原鐵三郎、岩崎利一、里見治男、木島利夫、山田亮三、小泉三郎、久保孝一郎）及び常盤敏太教授（特別參加）の行動

一二、二〇日新宿發、二一日（雪）中の湯、二二日（曇）小谷部は松本へ日江井と共に下山、他は先發隊も一緒に德澤小舍へ入る二三日（晴）奥又白谷スキー練習、小谷部松本より來る。二四日（曇後雪）池の平往復、二五日（曇時々晴）常盤教授下山、二六日（吹雪）二七日（吹雪）本日で合宿解散。

(4)德本峠（一二、二八）榎本、原、岩崎、小泉、久保、合宿よりの歸途をこの峠路に擇び下山。峠の上まで小谷部見送り、再び

徳澤へ歸る。

(5)徳澤小舍生活（一二、二八—三〇）　里見、木島、山田は居殘つてスキー練習をなせるも天候惡く澤渡より下山。

(6)奥又白池生活（一三、一、一—六）小谷部、森川、佐々木、船本大塚、連日の吹雪を忍んで天候を待つたが、六日午前中の快晴に一峰の途中まで登つただけであつた。尙ほ船本、大塚は都合あつて、二日に下山した。

(7)野澤温泉（一、一—一、六）森脇芳之、鷲崎雄四郎他部員外以上極めて大略を御報告いたしましたが、合宿の總體的報告は森川より別に行ひます。

(8)山田温泉（一、二—一、六）岩崎他二名
晴れた朝後立の山々が眞近く見えた。こゝは便利で山も相當面白い。たゞ雪が惡い時はいけないだらう。

(9)志賀高原（一、七—一、一一）原他一名
これは專ら寫眞を撮られに行つたスキー行。

(10)霧ヶ峯（一、九）小谷部、森川、佐々木
奥又白谷生活からの歸途こゝへ寄つて滑りまくつた。

(11)赤城山（一、一三—一、二三）先輩、學生懇親スキー行。

消息

近藤恒雄君　任地は既報の通りですが、住所は大牟田市白金町二井社宅との由。尙同君出發の際、吉澤、村尾、吉澤松次郎山口、增山、小谷部、小林、岩崎の見送りあり。

林俊介君　次の如くに蝦夷の國にてスキー場を荒して居ます

（イ）一月廿三日（晴）湯ノ川スキー場スキー行
（ロ）一月卅日（晴）七飯スキー場スキー行
（ハ）二月六日（晴）我朗スキー場スキー行
（ニ）二月十一日（晴）天狗山（小樽）スキー行
（ホ）二月十二日（晴）圓山（札幌）スキー場スキー行
（ヘ）二月十三日（晴）三角山スキー場スキー行並全日本スキー大會ジャンプ見物
（ト）二月十四日（晴）春香山スキー行
錢函（八•三〇）—春香山銀嶺莊（一一•一五—一•〇〇）—春香山頂（一•三〇）—錢函（三•〇〇）

船本文治君（部員）　杉並區高圓寺四ノ五五〇、太田方へ轉居。

先輩學生懇親赤城スキー行　一月廿三日
（參加者）吉澤、村尾、增山、小柳、新羅、（學生）森川、佐々木
岩崎、山田、小泉、久保
此のスキー行物語は、次號に新羅君が書く豫定につき目下詳細不明と致します。

田部重治•角田吉夫兩氏招待針葉樹會　二月十七日　於如水館
（出席者　吉澤、吉澤松次郎、增山、勝田、新羅、柿原、（部員）望月、小谷部、佐々木、岩崎
二月の定例集會を兼ねて、日本山岳會の田部•角田兩氏を招く。有志のみで先づ兩氏と共に晩餐をし、續いて別室にて田部さんから上掲の如き話しあり、終つて座談的に在りし日の古い山登りの想ひ出話しがあつた。部員の出席は試驗の爲め少數だつたが會員の出席意外に少きは誠に淋しかつた。